■シリーズ■

中学校武道
――授業の充実に向けて 212

――「今」の時代の武道授業を追い求めて――㊶
（巣鴨学園のこれからの中学武道教育）

巣鴨中学高等学校　教諭　大畑具弘

本校は中高一貫教育の男子校であり、男子校ならではのさまざまな行事や授業を通して多くを学び、将来につながる教育を目指しています。その中でも武道を教育の柱の一つとし、剣道を校技としています。日本の伝統文化である武道を学ぶことにより、人間形成を主眼として、技術だけではなく、その精神を育み、生徒が持つ無限の可能性を大きく伸ばしていくことができるよう指導をしています。本稿では指導者としての私の考えを述べさせていただきます。

1 本校の教育理念（教育方針）

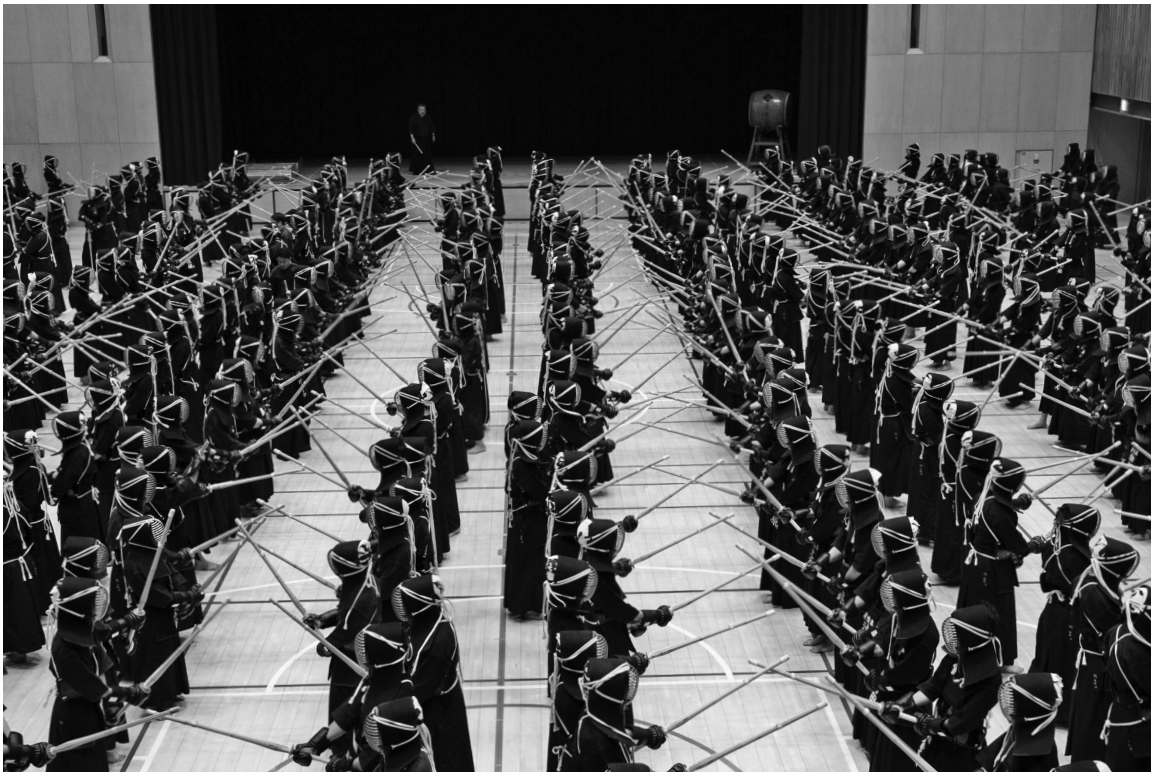
本校の教育理念は、「努力する習慣を身につけることで、可能性を大きく広げていってほしい」というものです。この理念は、１９１０年の創立以来、本校の教育方針の土台となっています。

本校は「硬教育（努力主義）」による男子英才教育を実践しており、次代を担う生徒たちには、広い視野や語学力、問題発見・解決能力、表現力を身につけることを求めています。本校では勉強だけではなく、さまざまな行事やクラブ活動を通じて、努力し続ける姿勢を養うことを重視しています。

また、国際教育においても、英国・イートン校でのサマースクールや巣鴨サマースクールなど、時代をリードする取り組みを次々と実施しています。

2 校技としての剣道

本校の創立者である遠藤隆吉先生は、創立当初から剣道を正課と



寒稽古の様子

して取り入れました。

剣は人を切るものです。したがって、それを振るう者には当然のこととして、正しい心と人としての正しい筋道が求められます。遠藤先生は、剣道の中に道徳を見いだされたのだと思います。

常に自らを厳しく律し、修行に励むこと、すなわち努力を怠らないという姿勢を学んでほしいというお考えから、剣道を校技とされました。

3　寒稽古・校内武道大会

本校最大の武道行事は寒稽古です。本校の寒稽古は、中学1年生から高校3年生まで、原則として全校生徒が参加し、1月半ばに朝6時20分から約1時間、6日間にわたって行います。

3学期は授業回数が少ないため、稽古の機会を確保するという点においても重要な行事です。通学上の事情などにより参加できない生徒を除き、ほとんどの生徒が参加しています。

また、最終日には納会として、稽古後に豚汁が振る舞われます。前日の空き時間を利用して体育科の教員が約2000食分の豚汁をつくり、係の生徒が夜通し温め、全校生徒に提供しています。

寒稽古期間中であっても、普段と変わらず、授業、学校生活、クラブ活動などは通常通り行われます。とても厳しく大変な6日間ですが、それをやり遂げたという達成感や成功体験、また協力してくれた家族への感謝などを感じることが、人間的な成長につながると信じています。

二つ目の行事は、校内武道大会です。各クラスの代表が団体戦と個人戦に分かれて競い合い、学年優勝が決まった後、中学・高校それぞれの学校優勝を決め、表彰します。

普段、試合などを経験する機会があまりない生徒たちにとって貴重な場であり、大会はとても盛り上がります。勝負ですから当然、勝ち負けがつきます。勝利した喜びを味わう者もいれば、負けた悔



校内武道大会では生徒が審判を行います





寒稽古の最終日には豚汁が振る舞われます

しさを味わう者もいます。そうしたさまざまな感情が芽生える中で、剣道部に入部し、「強くなろう」「うまくなろう」と頑張っている生徒もいます。

こうした行事をきっかけに、剣道に興味を持ってもらえるのは嬉しいことだと思います。

4 授業について

本校では、中学3年間は剣道を必修とし、週1時間、体育とは別枠で授業を行っています。高校では柔道・剣道の選択となり、高校でも剣道を選択すると、6年間にわたって剣道を学ぶことになります。入学後に初めて剣道を経験する生徒がほとんどのため経験者にも初心者と同様に指導していきます。

年間30数時間程度の授業があり、さらに寒稽古を加えると、年間40時間弱、剣道に取り組む機会があります。

時代の流れなのか、剣道を競技



基本動作を繰り返し練習することで正しい剣道を身につけます





実際に防具を着装した面打ちの練習

としてイメージしている生徒が多いため、まずはスポーツと武道の違いから説明していきます。また、体育館とは異なる道場での振る舞いや用具の使い方にも気を配るよう指導しています。

最初は着装から始めますが、最近では紐を正しく結ぶことを難しく感じる生徒も多く、半数以上の生徒が縦結びになってしまうこともあります。また、後ろで紐を結ぶことができない生徒には、目をつぶって蝶結びの練習をさせるなど、さまざまな工夫をしています。続いて礼法です。これもまた、最近では正座をすることができない生徒もいます。日常生活の中で正座をする機会がなくなってきていることを痛感させられます。

「左座右起」と座り方を教えます。礼法では、形だけではなく、相手への感謝と尊敬、心身の統一など、内面的な部分を大切にすることを理解してもらえるようにしています。

中学3年間のうちに初段に合格することを目標に、「全校有段者主義」（前校長・堀内政三先生）



道場に掲げられている前校長・堀内政三氏が揮毫（きごう）した「全校有段者主義」の額

の考えのもと、授業を展開しています。特に、切り返しや面打ちには多くの時間を取っています。

基本動作の繰り返しに飽きてしまう生徒もいますが、根気強く、ポイントを絞って簡潔に説明することを心がけています。将来的に剣道を続けてくれた際、正しい剣道を身につけておくことにより次のステップへスムーズに進むことができればと思っています。

初心者は一つのコツを覚えると、上達の速度が上がるように感じています。できるようになれば、一層興味も湧き、さらなる上達への近道になると思います。

中学3年生の1学期には、1級審査を意識させるために「木刀による剣道基本技稽古法」を取り入れています。それまでは実技中心の授業ですが、刀法や理合（りあい）を説明しながら、技の成り立ちを少しでも理解してもらうことで、高校に進んでからの実技にも役立つと考えています。

本校では、全生徒に剣道用具一式を持たせています。だからこそ、全校生徒による寒稽古が可能になります。

自分の防具や竹刀を管理するところから始まり、手入れの方法などを理解することによって、自分の用具に愛着を持ってもらうことも大切であると考えています。物を大切にするという意識が希薄になりつつある時代だからこそ、とても重要なことだと考えています。

5 最後に

若い頃の指導では、「なぜ、こんなことができないのだろう」と思うことが多々ありました。しかし、今振り返ると、それは私自身の勉強不足だったのだと気付かされます。

今の時代は、厳しいだけでは生徒はついてきてくれません。厳しさと励ましを使い分けながら、いかに興味を持たせるかが重要であると思います。

年齢を重ね、剣道との向き合い方や考え方も変化してきた今、その時代に適した指導を心がけていきたいと思っています。

私自身、先生方や先輩方に稽古をお願いする中で、「理解できた」「思い通りに打てた」という気付きがありました。この「気付き」が私の原点です。

生徒たちにも、剣道を通して多くの気付きを経験してもらえるような指導を、これからも心がけていきたいと考えています。



黙想